

新たな進化の基盤となる1年に

学校長 杉森 伸吉

春爛漫の季節を迎え、新しい1年生が入学しました。ご入学、ご進級、誠におめでとうございます。長かったコロナ禍も、5月には5類に転じることとなり、社会も明るい兆しを見せてきたところです。

本校も、昨年8月29日に国際バカロレア（IB）のPYP認定校となりました。5年後には資格更新のための詳細な評価が行われますので、それに向けて、今後さらなる改善を図っていく必要があります。行事で子どもを育てるといふ大泉小学校の良さに関しては、例えば国際理解教育との結びつきを深めるなどして、引き続き進化させていくことになります。いずれにしましても、本年度は、年度当初からIB校である、本校史上最初の年となります。どのような組織でも、草創期に行われていたことが、形を変えて、伝統として残っていく傾向がありますので、この1、2年にどのようなことを行うかは、今後の基盤になりうると考え、単にルーティーンとして学校運営するのではなく、何がどう基盤になるべきなのか、教職員、児童保護者も含め、学校コミュニティ全体として、考えたいと思います。

一部の先生や職員が、新しい（あるいは復帰した）教職員に代わり、教職員も心機一転して新年度を迎えております。一人一人のお子さんにとって、どの学年も、生涯に一回しか経験できないものですので、かけがえのない1年となるように、教職員一同、精いっぱい教育にあたりたいと、思いを新たにしているところです。

東京学芸大学の附属小学校は4つありますが、将来社会の役に立てる人間になると思う度合や、先生方は自分の良いところを認めてくれていると思う度合、学校のルールを守れていると思う度合などについては、本校の数値は突出して高い傾向があります。これは、生活団活動や、行事、ふだんの授業などを通じて、いわゆる非認知的能力や自己肯定感も、培われていることの証と言えると思います。自分の幸せだけを考えるのではなく、他人の幸せも考えるという共感性や目配りができることも、大切だと思います。本年度の重点目標でも、「全員にとって居心地の良い学級・学校」というフレーズが入っているのは、そのためでもあります。この「全員」というのは、単に学校内の人だけではなく、自分が関わる全ての人、というニュアンスもあります。たとえば、登下校中に周りにいる人々に、少なくともいやな思いをさせないように考えること、なども入っています。

また、「きれいな言葉」も5年間使っていますが、いじめなどのトラブルが生じるときは、ほぼ必ず、きれいで「ない」言葉が使われます。人は、心が穏やかでなかったりするときに、言葉もきれいでなくなりますので、「自然にきれいな言葉が出るような心持でいられる時間を、学校でも家庭でも、心がけて長くしていきましょう」ということですので、教職員や保護者も含めて、日常生活で、きれいな言葉が自然と出るような心持で、できるだけ長くいられるようにしていければと思います。

「きれいな学校」も昨年度から重点目標に入りました。おかげさまで保護者や教員からの評価の上がり方は、この点が最も大きいですが、まだ改善点は多々あるので、この点も含め、全員にとって、素晴らしい1年となるよう、何卒よろしく願い申し上げます。